三七全傳

南柯夢

三

特別書庫
1普4
600
220

イ4 特
600
220

白夢南柯後記巻之三

東都　曲亭馬琴編次

前帙第三

雨後の月魄

叢蘭まびらんとすれば秋風こそ砂ろ。忠臣諫んとすれば。庸主こんを拒む。さるまこと忠義の狗とあるとも。乱離のんとあるとるれん。生おうそ五十年三寸呼吸絶まが萬事休をとーあ情む身さへ骨さ。朽たそ。殘るん後の名のこそうばや。知遇赤根まを進ん城を生市とそるん。米谷紙捩て封ふ。謙て宿彩の旨あれが道をぐら神社仏閣をんる毎。必其処立うて。祈念まるりしが。左よ右及も果敢とば。昨の雨よ及さいて。ぬるけまば。奴隷ど肩代助んとそ。轎ふかるうぐら。歩行るうぞ。ゆく遅と。春の夕ゆまを霞こ。賤夫が籬邑の紅梅も。日景ふ映じて色とまよ。鶯語へ

いそぐ天洋雁も。ゆくとつくどとられいはい。おれて歸るあ族ゆーあれど。君を
ゆくが急ぐ。その日申の下刻ある。米谷越の舊路ある。標寺のとろのさて
長き。松原よりよりより。浩知よ。年の齢六十あまりある老女のつとめ
ものとおぼしくて。拷の衣の襟を刺する。計月太ある。とは一ッ身そ。木の皮の
如くよれる帯を前よ結び。髪結みどるある。白髪乱れ乱つて。俄頃よ
病ひ發りぬとうんえて。ゆさゆさ。泥よ塗るをも厭つど。道端ようち臥
さり。まを進ん。四紀ひさまよとまをうんて。ふく懐を。猶て私章丹とよこの
老女を扶起さ。そづくくその母さりに立ちて。各紙同宿百紙多れが老女
悩める目を開ん。赤根主役。さうんかうんて。苦しげる息紙吻さ。さらまを
今市の里ある。いとかさけき活業紙とるるりの母よ伴り。まるん去年ハ。
長き病五ろよ閉鎖ら。こちら死ぬぐうるひ伴りとふ。過世の所業の

ゆど滅せどやみろけん。この春ハ大うるよ伴りよ。今朝ゆもらが
るが。友さちと物あらびひて。その人よ巻倒されさう。ろろ死ぬめるひあそ。
いて恨ん憤り。月とも志を親をもあり人で。矢庭よ仇を打ん人さんとそ
菜刀うさびて走去るを。引留んとそ追ん伴りよ。老の足ゆんがこのひ
ゆくて彼此を索ゆどん行よ。牙さん疲労て忽ち死ぬ。ろろ死ぬ。
怪を来るんいとど。苦しく伴り。人逆をが徒拵よ隣を打て。続井家臣
赤根半之進と寄ーのんが隙より忍なが守の執柄ふとそ在ーみれ。この
松原ハ一里が間人煙絶尽ゆる野経の。人を追人ーろ忍えるんとろ
過ーるゆ。どてもかくても野さ。ゆるがりけ吾俤をゆ。うちおしもつど
ゆの長きよおのがゆの。竈ゆ仇人を救んとり人情のいろうんえて。なりほ
外るよかれ口説。どんちねども果を遮かつぐ。ゆて嘆息。鰐原道路よ

仇なあれば。因果の不徳ゆゑ。家宰の罪なり。これ苟も宿老のほとゝ。
かゝる老女を救ひ。ぞんざいなる不仁なれ。もろもろあれど。今市へ送らんとせば。これうり
平塚へ移るよ仇ぞ。丹三この老女を。ひろ濡ゝへ扶助して。岩屋谷の藤村
なる。村長ぶ宿所へ。ゆゑ。これ宿所の旨あれば。汝達よ。ひろれて。和途の
八幡宮へ。清し。且は。追放ぶ。とゝくとのそがせば。丹三い肩うち鎌ぬ。
和途へ。こよう十六町あり。ゆゑ私の物請ことゝ。従者ぞ〳〵俱〳〵
ありんい。使ふれとよ。ぶとゝも。基沢がめさるべ。今この老女ぶ。ひろ世ぞ〳〵。
この。ひろよ月を暮〳〵。狭ゑんい。実よ危し。といわせもめ〳〵ぞうち微笑ミ。
丹三ハ。ゆゑ。ぶ。往〳〵。ゝと。学んぞ。ひぶ。腰ゆい両刀あり。縦隊の。
野伏ぶ。宿よ。撞見ゝも。ひぶ。害怖ゝとのあるべ。ぞゝ。ぞゝ。紀日郷ゝ
沒りぬ。そげ〳〵。と。焦燥ぶ。主命脱ゝよ。乃ゝ。〳〵。丹三ゝ。ゝ。丹三ゝ。

老女をもとより立て嬌艶の雪せんとすれば老女は涙さしぐみつゝ。そもそもまゝ
ゐ弱の手ふぐ。今をもまゝ露の命の。何情かくべき物体なり。溝鼠よ
異なるもの。泥を塗るとても厭せのいむ。仁田山細の蒲団布しる。橋なにさえ
投ずて送りやらんと宣たるに。乗死中でよ有うゝ。その死骸の後も言れ
恩恵を忘まじきまゝ。うらひ付ふ移ど。ゝつゝ死る死のちそへ。なゝ
身さへ貪ゝ。つゝそだゝその勧労をせんよう。只この隨分とそべと。常を
合ゝとれば。まゝ進ん。たゝ右ゝよ沈を掉。やよ老女うけるまゝ。かく沒を
勅ゝとゝ。ゝ私の情よあゝ。ゝとれ国守。続井殿の仁政ゝ。推辞
ゝもんに受れこ。それのゝ。ゝ。ゝ沒ゝの子の猛さを追て。都ゝ。死
ゝれ。その子の不孝を隙。かゝ親の慈悲といゝんや。丹三も又ゝ
ゝ。ゝ。ゝ沒ゝ。此彼よ。説示ゝ。ゝ。老女ゝ感佩し。

続井殿の一老職。赤根の殿の上を教ひ。下を憐ゝ。ゝ牛うつ
童ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ疎ゝ。
人の誠の嬉ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

領ぜんと云思ふ。従者もあり。主よ別ひて別まを告。橋子を擔起し。
袴を肩掛。行李を扛擔ひつ。操李のかゝ紙手そ。別まを告んとすれ
ども行よ。ずんの進遠し。丹三を喚そめ。これそふすあれば小刀をば。
小雲時汝よ領べ。これ汝も志る如く。恩賜の一刀なれば等閑み
なることあるべ。丹三後方をふりかへり。まつぶ行李ふ著よれる。夾ずんの
中刀をうり出ゆんと真さらそふを推梦め。行李をとうんハ炬ハ。只い
須臾の後ろよ汝が腰の刀と換ずんつざそ件のもん佩刀を丹三ふ
遍与よけまば丹三ハまづものゞ中刀を取て主よ進ど。件のもん佩刀を
茅〻。うち戴きて腰よ帯ろう。ずんの進ことういそく。ゆよ丹三病れ
老女を道さぐらゝ。ものちひて勦まど。衆皆ゆ紀稚と侵ーろまば。
従者ハうみゆ紀とゆよ改を低遂よろれて去去ろう。ずんの進ハ従者ホを。

求ゆ〻ずまで月送ろう。ろれ今和途の八幡宮へ詣ることゆ今月二更の
比及ふ岩屋村へ到べ。彼処ろ茅谷へハ遠ろば従者ホが長途よ
疲労ま。熟睡ずろんとれ生ー接て。潛よ木精塚の辺よ赴ゆ。ところ
ずづよ腹ろれ切て居よおるべき物の怪の。常沢負べものづろら。読井の
家ハ安寧ずんの。暁を臨終と。ずろで家ふハ妻や子ふ結つあん
不便ど。現世れハ武夫の。ろけ入る誠の道よそそ。ひとろごちろ法く
杖ゆ。曲らぬ心一ごづよ。畔をめぐりていそ去さる行よ丹三ふハ橋子に
病臥せる。老女よ粥を。して勦ア慰め。操李へと松系紙十町あまろゆ。く
行よ。技塚隙ふれ並松の梢よろ月ハ暮まを。行べきかゝいと晴し。
さて火を燈りて。続松よ三ま灯ろ。衆皆ゆやく道とりとめて亦
八九町ゆ〻行よ。月ハ出べきころろのぐら。この処ハ特よ路陝く。老松小松

全奴
樗本の
松原は
全奴
赤根と
奪

たたんとう。ふかく上る生繁りて。昏ごとに晴けまさぬ。夜はさらさぬ月も漏ぬ。ふり照る。続松をのこ。御導へ。衆皆呼つ呼みれ。幸くして。この樹下闇を。さらに過まさぬ日今月の昇るかと。おぼゝしく。哭ゝ。里のとの明くるにつれ嬉しく。丹三は主のうさ。ハ九人うち陸れ。さらて逐ゝ人を便はしても。るゆ。ほ。経ぬ。背の樹間を。ひとつ。さぐるたぐるも。其のうち。難苦ゝ。堪ぬ。疲ゝ。追ひも著ゝ。間ちゝやゝ。来ゝ。人とく。文に高く。声を。呼りけて。ハんゝ。主ど。月ざゝも。さらぬ野手王の。烏夜ゝ。ハゝ。ひゝゝ。昇ゝんとする月を仰ぎて。亦而おゝ。さらに過ぬ。忽地背後ゝ。前音高く。飛来る。鉄丸丹三ぶ。たの膝。三寸。搗傷ゝて。橋子の戸を。碎くだろゝ。おゝゝ。礫と。打抜ゝ。裡ゝ。若と。叫び。声と。ともふ。浅痍の。丹三も。余所ゝ。ゝ。嘴もとゝ。ど。空に

高ゝて。倒まさぬ。衆人ハ驚ゝ。吹ゝ。ぢ。さるに。不意ゝ。うち。かけ。鉄炮ゝ。膽をひゝ。ぶれ。碎ゝ。橋ゝ。ハ。橋ゝを。投居。或ハ。踏。抵と。捨。逃ゝ。まに。ゝ。拉。松。ゝ。ゝ。ゝ

打ちれば忙さ。とべのくとうろう領ーる。おん佩刀をこ引抜て。癖者が
胴を。刀夫さぐりに丁と砍る紙。拂ひ除つ。蹌踉て。打大刀風乃
烈ーなる丹三が矢傷の鳥。鉄炮痍の特よ痛こそ。進退も自在なるべ。
巷やうやく衰て。背を砍ま胸前を辟ま。躍くを癖者が。ゐるうと
蹴倒ー顕を。後ろよ踏居て。ひそごさと刺刃を洩る。鮮血と
ともふ。天ふも新のさー潮や。松の杪をえるる。月を。うち仰ぎる面魂
庸人みるぶ。えふ。

木末の点滴

國よ居るけまば。四民聚ぶ。隊よ主るけまば。往類入全うらぶ。れば
まこ進ぶ。従者ホハ。こゝみ。悉臆せ。ゐ。ゐ。ざれど。鬻よその主ふ。ちち
ろんて。人のこゝろひとゐるぶ。ゐ。ゐ。間夜よ跡絶る。ゐ。ふを過ぎとれば。
ろ音に。岩代ぶ。そんとゐ。ゐ。後ぶ。ゐ。ゐ。ゐ

宿怨を報ぜんと。時至てちらんとも汝主君の仰を受夜を日に継て。米谷へ
赴くとも。きのふ今朝ゆくも傳吉。今朝ゆくも跡を跟さんとも。汝が後者騎ん
かろくくまをやさんとの松原を過るとき。白い幕をんと推量して揉径より
走り先ごちこに行て。くくりたのもその頭を受さらんと声高に罵り
のへ。橋子の戸を蹴ひらけば。月の光王の隈なくさしいる。橋子の裡を
鮮血に塗れつ。卧るものの仇人うちで。ひぶ養母晩稲なり。是ひとびとり
仰さるるに驚て倒れ。ちんとして泥に臥て。方を起しやよ母は全くして
ひぞ打ぬ。ふとの橋子に杠乗られて坐したるひとびとをたちやもられぬあや
仇人に謀られぬん。遁逃ぶべき時を待く。既に怨を復せとたびしのを
られいさて。滅まとも朽ちくとものふとの紫のるくに。悔ずとも今ぞ。
のひとびとがうた天の縛母の教に後ざし。罰い目前五逆の罪人とひの八千たび

百千遍。呼べども彼が恨くと。蹉跎しつ声を惜ぜ草を嚙ぜ哭しが。やや
小涙を拭ひて。卧たる母を抱て起し。喃母は痩い涙くをいたるよ。公を鬼よ
母へと勅つ又呼び活つ。ちら橋子ようち扶出て。あのが腰に結びたる三尺に拭
引解て。洗口を楚と結び。又高ちよ活る。その声ちがて耳に入りてや。細
中に眼を瞬て。和殿い仇人を殺ひ。乱まて狭母と呼るをうれまい
ひらぶ。勿論ぶの幼稚とて。祖母さ多ひろとも小家を捨率浩を
出。漢西のかへとて迫げて。猶小起て。そのとれい殺の祖母さ多が。吾俤
小憲をはえて汝旦くられを。ぶまこ。ちろべて人のまとものてと宣いせが。汝が
まるてとらけあつらぶ。さるとれい世ようて。母と呼れると呼ぶが。彼初の私
言葉ぶいつまぶも吾俤の孫。和殿い主の孫。うや仇人とぶひ
たぶて。傷るとあれぶとて。五逆十悪とのふうめらんやぶろねとのるとと。白来

小変る言の葉の厳と正しく小全く成り。されば悔羞る母の慈悲玉るゝ金と熱湯の沸らる如く涙を拂ひ宜ハもちるハ全く成を悪虐残忍の人よりもとそ身を殺しそも今更小言葉を設て不孝の罪を脱さんとするゆゑ如此恩召仁慈の浅からぬるも儀まり平。あん身ゞ主の孫みもめれ。繦褓の中より養れ。人ゞ成よりたれゞ私るゝ母ゆり子ゆり乳母とのゝ子ゆるゝ母とゝ字ハ別られゞ言さゝく夷狄の国ゆゝ親を殺ゝもあり。ゝ世けどそゝ人ゆゝ人よりゝゞ人と生ゝる人ゆゝ人とゝられて一日もゝの身を容ゝ里おらんやゝとて済まん平。ゝゝゝ世ゆ岐婆ゆゝとも扁鵲ゆゝとも救ゝとて済まん平。ゝゝゝ母れ前の絶も果ざゝ息の下ゆ小伏て犯せる罪の百が一を聴ゝべゝ。許さゝゝゝとゝたゝ口説刀を逆ゝゝゝるゝゝゝ晩稲を吐嗟と身の苦ゝを忘るゝまゝゝゝ捧ゝ禁めゝい物犯ゝゝ死ゝをゝ憂脱ゝ

うゝせ身の息のゝゝゝ吾倆を損ゝ。物ゝゝゝ情ゝゝゝ怒ゝれゞ頭を撞ゝ小も右ゝも全く成を助んとてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ母ゝゝゝゝゝゝゝ宜ゝゝゝ理ゝゝゝ似ゝ狂ゝゝ竹鋸小刀を挽ゝ木の扨小梟らゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

目も眩くろ消るがごとく涙の玉やあくらん志渡の浦曲の蜑おらでさえ乳めかふ
痩四五すいづまも灸所の痛まるり全双い月を燭かつぐ〳〵とえてふてび給へ
るぶ鉄炮の寵違ぞ。搦るの戸を打抜たるよりれいぢ〳〵刀瘡憑ったる天神。
地祇も捨ぬべくらぞも母を殺せ罪をぶ辛く脱たりとれをうまてと
ぢふるもの悲しれ母の絶命ぶ孝之進這奴全双が母と知て誑引出
刺殺し。搦る又隠せ幸ひてまぶ絆の絶めるねやあらんぞもつとて素うへを。
あまぞ仇人よちら丑ろん実父養母の讐敵累る怨い這奴が頭を粉よ砕き
醢よるくとも飽ぞ赤根が往方ふ知りつ米谷小藤勝負を決せんさいとて小藤
立のぶ。拵り詰たる巻の上よたぶる涙の玉叢砕くいと物ぶの考えの歎
そめれるる晩稲い苦しれ息のやよるぶるの顔をうち瞻り縁故をぶりめへ
祓べその凝ひけれども世よ誠める人のぶをらめのさら山さらぶく小和殿を讐

ともられ[illegible]の母とも赤根ぬのぶるべせうへのらぶ。男兄の生平
とひるぶく道すらぬ故よ殺れあひ。父の怨を復んとて。この大和路へうつ住
活業よ假托て毎日よ平城へ交加つ。被人を寵めふと豫ら猜しれども流石
ふうちもめしあいぞらぬ呼みとひあら禁るうもりしよ昨夕より和殿
けたの気色特更よ怒を含今朝未明ふを遠へく。力をさへ隠しりて更ぶいぞ
あひ〳〵ぶくまんく。ひりとるく。うちもあれぞ跡追て日の暮るまぞ彼此と
索めれど竟よえめへいく〳〵疲労て忽ち癌よ脳ふ塞ぶらの松原の
めるくるる。道次ようち臥たり。折しもめれ旅ぶる武士の後者八九人を率て橋子
を撞らしたるが。吾倚をえうつてあく憐ぶ叮嚀小同るく小ぞ病よ重れ
頭を撞て。不図澄堀を向上ぶ。続牛の家臣赤根ぞ之進と牌を打たり。
送よ面い認らねどぶよ恥るとのぶるれば名告をもはべ兵衛よ推辞小りれど。

仇人を狙ひ
しんて更よ
怨を
おし祢
全
古今
祝ひ
ひらん中うこ
たてを数さろ
りされるらめ

彼人元来上総敎ひわを嫌むこころ深く。豫字一点違りぬ。さ多く小勳を真
ゝ小説論しく。吾侑を橋まよ扶来し。岩屋村ゐる長が宿所へ行てけとん。
私卒丹三と申らんよ宮えちらぬ。ゆ和途ゐる神社へ宿願の旨ゆれが立ゐぐら
糸らんとて後者俱せど彼ゆ。遥よ別れ去ゆひたゆて道すぐら。ゆの
丹三とろ〻〻人のひと叮嚀よ勤ま慰め。橋まの内ゐりける。腹紗物うち披
て梨まひとつ〻り出ぶれい殿のめ〻めまちま〻春の梨まいめぐらゐゐらんて。
渇ぶれをなぐ〻とてちのが力よ著たりける力まをそえて〻とし。主といひ
家肆とゆひ。ゆくまで好意ま〻るゐのをゆゐる過世の悪業ふや。ぐ〻まの
実父い腹きたゆ。ゆろ仁者を謀らんとて可惜命を預〻らんぶれさゆ〻よ
全双が父をゆ〻へ生憎ま〻の道理も宮ま〻ふらゆれの旅ぶれ途
ふく但ゆ〻ひ〻ゆ指を出よ疑ひま。ゆま〻ぐ〻ふ〻ゆ〻ぐ〻ぐ〻

詰て。刃の苦ゐ絶よ堪ゆぐも。老が命いつゆ惜ぐ。赤根ゆ〻よ恙ゐれ。ゐ〻ゆ
無ゐふゆれ〻と苦ゐ絶まに神佛へ人ちらぬ堂を合し。禱る外仇ゐるのしま。
暮ていとぐ樹下暗ゐ。ゆ松原を辷がゐ〻よ。打かけられたる鉄炮ゐ。丹三どのい
矢庭よ仆ま漏ゐまよ打撫ぶれど。却吾侑い恙ゐ。こい全双が所乃ふけ。
ちゐて〻を果さぬゐ。ゆ跟寵ゐ〻ものゐびい命も終よゐ〻虫の火虫の流ら
焼ゐぐ。彼人のゐよ死やせん理ぜめても留らぬ。ぐゐまを憇諫んゐ。ゐふて
死ぐ彼人よ。ゆのが誠もとぐ〻べく。全双も仇敵ま。ひとぐまるこゐや。とゆの刃
一ッを恩愛と。美理ゐ〻ゐ〻ぐ。脅近ゐ。彼力ゐを探取ま。咽喉乳の下
辟げども。老の養のゐひゐ。消果もせぬ月の春。野ゐも山ゐもあ紙ま。
ひゐ〻ゐ精〻ぶ。ゆの声いま弱ま。ども。命つれゐ紙祈祭の落ゐん裡も
ま。を〻ぐ。全双い中ぐ毎よ何と遠んぶ〻ぶ〻。絞ゐものぬ布ゐのぶを。

たびく顔にあり當は。牙を差つ。牙を恨む憂みるかまちち雄が猛犯も
軟を果て。砕る脳を敲犯居南母は宮ての所犯で親の教を受ずて却親を
詐たる。なのぶ公の敵りそ仇をい怨で養母を喪ふ。この世の不孝い過世の悪業天
罰まいあるべれど。悪人すりとも父い父仇人を終ま汐終ぶとも腹ま備らね
ぞまの恩い大和まのりとある。山より高犯母をるぞ。非命まい殺しめい月日い誠を
照さね欲。さるふてもるぶ母は。さぐりの恵も受ね半を進を厚く思ひて。命
だま惜めいざし。婦人の仁も物まらる。ろ汐ぶ。ゆ。詰きび僅まうち点頭。
如此向まんと思ひしまよいいねいのまよ紙とるとべ。恥ぶ。ゆ。犯まるぶ。
せめて今殷の罪滅しゆ。ぶうへ詳ま告汐ちん。ぶ父い肢部氏まて原い由緒
ある武士まりしぶ。ゆるなまや退糧して。城下郡。佐保の庄ま僑居し。細犯煙
を立ぬい彼初ぶら十餘年幸またりいま幸まて。父母より[illegible]い退月ま。

僅ま病ぶく汐ぶりぬいねその時吾倩ぬ二八の秋で只一個の嫁ぶりて同郷
ぬる柴賣ま。キ六とい者の妻とるりくをりたり父母ぶくなりぬひ後吾倩
い姉夫ま養ま。ぶ二年の月日をるぶんま。ぶうぶた時の忍ひまく。近きぶりま
ひとりをる樵夫久四郎とい壮佼とぶのびめい夜の数ぶさるりぬ。え未件の
私夫い酒を嗜牌を投汐をぶぶくまるぶんぶ。ぶるるるまの竿も着ぶえん
の布まも貧盡し。剥姉と姉夫の衣服調度を盗ぶ。ぶる私夫ぶまるら
ぬ拉びの代とぶるま裳ぶえて面目ぶるさま夫ぶるとも。佐保の庄を逐電し。二年
あまり彼此をさぶぶひて。ぶるぶ。浪速津ま足を駐めぶ。小十年をぶる鐵賣
買汐ぶりぶ。ぶる清ぶれば。夫婦共稼ま挿ぶども。鐵鈔三文ぶるものとらず。
さまし。年。一ぶい。坐草まぶるぶるるるぶ。世ぶるる揖のまるぶらねばの居乳の
ぶるを幸ま京へ上りて刀屋へ乳母ま奈りぶ。ゆくて私厳を育しぶ。ぶるるま

姉夫半六どの。不憤僥倖のりて。続井殿小見参し。五條の縣主となりしは。
その比爪よ傳聞へしが。姉の綸絲どのゝ次の年よ身まうりゆへ。汝の悔
勸解んゝも既よ便著を失ひつ。富る縁者を有るゝら。汝の貪しさを汚も
苦び。赦いれもちゞ不後い居立の道い絶果る。大和津の四主ゝらでも世を
憚ゝ故郷のそらいと主くるつゝと。どふよつけて奇紀。半六どのを汲引
のひゝとゝ笑えたる。典稽ぬの前妻よ由縁ある刀屋へ奉公し。つゞ外任前の
半七と同僚るし。今市全八どの遺てよこゝる。和殿をゝと。母とゝ
ゝれ脱ゝぬ因果とゝいゝよ。ふゝふゝ。ゝゝゝを。匿りのゆち大和る。赤根氏の
ゝとゝいゝ。耳引立て笑偏さゝと。物ちゞ。赤根親ゝゞ浪沈のゝゞ。又全八どの
王外任の刀称のうゝをさゝおぼろけゝらゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。
法絶米よゝらゝゝ。受ゝ。袋の口ゝり。向ゝゝゝゝ彼人と和殿の交ゝの好

交を苦ゝゝゝ忽化よ又の仇人を殺ゝんとゝ日来ゝゝゝ和殿が徒気さ。
とゝも殺ゝゝゝゝ仇ゝゝゝゝ

中ぞらまで矛まろびも又吾倩が刃よ伏して非命よ死せるものうらんときの
満奔よ人を苦しめ身を苦しめ色造悪の報ひくこの世を以推とれい和殿が
父の仇人と指りの天下もいあらざめれど孝ひふるさよ讃ぜも仇人の外叔母を
経よ留たりられらの道理を辨ず人を恨ぜ身を思し家を興しく亡父の
侍若を雪めうとの声次第よ細まども深疑よ居ちぬ長りのがりい
現も雄しく安えたりされば恨て改まび君るもかそれ死んとうく言とい
賢者もうとられをまり現との晩稲の老女ようた時の満奔よ一生
を恨たれ今恨をるとれい姉弟編篠よをさく劣らば微妙そのをを
教る男児も羞るの多めうと全双い額小汗く滕よを駕耳を傾け
首より尾まで孰と安と嘆息く一うとるんの如く因縁のあるはを
一点ぐりもちらしめぐ母の世よ在ん復い復雠言のよ思い絶ず出を

中ちらへなるべりしよ強るも禁めの紋婦人の仁とのをらひてけふのゆをさく
告ざり。まるられりのが恨と実父の怨を復ちるも更よ養母を喪ぐ孝道と
られをいんや特よ痛まを負る親を草の上より居てその死を祈ぐ罪深
噛母ひを焦燥く長く。りのひゆぐ殊更よ拙ん命も危めるべく夜風
瘡口よ入りて破傷風とるるとれい療養終よとぶれめといざ負れめ医師許
伴ひるべくと立るを掉を掉きりて改を掉虚気とをいるめるの法んとらぐ
ちめうりいぐ刃よ刃を傷らんとひくるひ果つ只惜るい親とるが尽ぬ
名残も一世の別まうられとるもちんちべる。只吉みをうちみさよ身のほど
安く果めへと草茶の陰より祈るのを南無阿弥陀佛と唱めぐらるる
の血力をうんとりて。咽喉よ突立所りれ切刃を抱て磯と俯とぐりり隙も
わら捲の袖のこいとぐ朽ちる全双いりろとも小消ぬん雪の草の上よ臥

なる母の亡骸を抱き起し〻〻又咽喉を更に善悪もわきまへざりしが忽地儼と思ひ起し〻〻乱れたる鬢の毛を掻撫でつゝ襟を合せ帯を抜とりつゝ亡骸をうち打ひ母の魂魄のほ去らどゝ今全双ぶ人ありといふとも。そのまゝうつゝ仇を殺すべきなれども父を害せるこゝろ小志を果さゝ又養母に不孝なれば仇を殺すべきなれども今あるべからず。某一文一字を識らねど幸にして安藤喜山の豫讓と云ふ知伯が為に衣を刺し怨を復せり例を思へば。われも今羊〻進ず。橋下を打ぐ怨を復せよ擬ぶべし。されどゝく阿容こと存命ん人小あらじ速に自殺せ母の神霊且く待つ。冥土の旅の郷導よめさんめいひもめくべ諸祖ねぎ血刀を復へ突立んとするよりひもめけど忽地背後より人影〻〻。

等まと一声呼び果ぬ。安まと抱れとめしうべ全双の怪こゝを友に頭を回らし。隈なく月よりへいれば。されば則別入るべ去年の秋五月六月の日浪速まく別まゝうり絶く音耗せざりけり。敗鼠の四五六なれば。云そもうかとだうりよ且羞くしめとろをきべ当下四五六〻。うりあく次を奪取く。朝より納めつ。呂晉よ嘆息〻〻全双友〻ちの交り竭せば。今てよ未だ見を奇〻〻そのうらめ。これも不思議小呂のこゝ。さても去年の冬。和主い母れを負て何地ともなく逃去り。もその次の日。活業のみよ啓行して。この大和路へ赴く六田下市なんどを経て。吉野の林麓よ春を迎へ。睦月の下旬より穂本よ猿宿をかえて。彼此と駈めるけども。和主親るべきうらにあるうらいちべ田中の里より。人のぞまて。蕎麦食せんよ。亭午より来ることのられりこゝ半日

生業を止めて。彼処に起臥。日暮て歩るこの松原まで。和主の母がを
枉死の顛末。聞うとて。ものもたづねらるゝを。ほうこうをたらんと思ひ
て。彼処の樹蔭に閑寂をり。共音を忍ぶ袖の雨。たゝて霧間いるりしを。
寔に和主が母刀自。傳稀なる老女にて。又和主も男児なれば。強ては
仇人とたゞり。敵なる身を恨て。自害せんと思ひ定め。潔くいさぎよれども。こゝ
死び狗死て。常言ふ。ひの腐とも。談合なれば。ひとつの計較あり。母の志に
情らぬ。和主が望を果さべし。かゝとも。狗死せまほしき。欲とのへ。全女容
を改め。縁由をたらんしるべ。今更匿むべうもあらじ。寔に。あん身いるぶる
の。産砂とそ。なれ。浪華にそ。脱れがたし。恥を隠して。路銭を贈られ。
今亦。必死のこゝろを。敢て。謀を授らん。ひとを教を受ざらん。説示しあひ
ねと。歎びあまる目に。涙顔。主もたゞ。涙を門立て。四五六

ほとゝぎす打ち。笑こゝ。ふてゐを。詐ぜんと。逃去ぬ。赤根が後者。切り来
て。竊ませば。謀い。忽地。洩んと。猜くい。道もぐら。密かに示せべし。その
身貸ねとて。あて。密語いうち。點頭。たゝらば。今夜。森本と。虚空藏越
の。捷径より。彼山。走登て。人たれど。彼大力を。シヤ。音高し。樹の木耳
岩も。物の。憚あり。月の光にも。二更い過て。ひらけた山路を。たゝるべ。丞こ
過る比及ん。必彼処へ到るべし。らく。とひそめ。立れば。ひろゐるゐぐら。全女そ。
母の屍をいろせまじと。躊躇。間小四五六。佶。ちえこる。煙樞。ちれ。究竟と。枕
引抜て。頸ねぢ切て。物とり。生。ちれ。くと。亡骸を。聽て。納て。弥陀。憑むられ
恐辱の。遣樞。ちらるゝ。ものゝ。全女が。肩に。浅痕。あり。ゐぐら。ものを。背
負ひて。身を。起て。所定ぬ。野辺送り。ゆ。去年の。愛物。絡。借残債を
欺詐の。椎もりの。賓。とりて。やる。歎。死よ。おほ坂を。越て。太和の土

とある人をうゝ評とひろめ〜。死花さくねん身のとゝ中。世の来るあぐらうん秋と。ひらきて四五六を先へうちてぞいそがゝ。浩処よ手〜進いろ

半之進

の祝ひ帰ア来ん。小松が中小刀を偽〜て。一五一十を汐と張ひ今全次と四五六が走り去るをえん〜歩く出冊三が尻のほとりいくたびも索めぐりて。鮮血よ染たる順勝の丹佩刀をあい取アつうち戴たる

全次

四五六

小挑燈高く揚。新よ著たる刀尖の血をうち返〜信とうんて。さてうとあゆむ声とともよ。一町ばかり走り過たる全次も四五六も。歩どろんみがらうんりくまぶ月ろ明き挑燈を引提て彼処よ立人あり。あのが往方をたらまど。

ろうとも小石を掻徊て殺矢と打びあゆまうぶ。打あとうん挑燈の火ろうも先へ滅てもく。亡骸ゆぐら三人つれ。足小信〜て竟去ね。

米谷の併塚

都說全双四五六人呉服屋谷と虚空藏地の名の間なる。山田のほとりに小未よりけを。月八甲夜ごろ隈なくて。僧ごとに便らるあらねど。途にも遥に寺を離れべ。追人もいとまぞ来べれ。小要時憩てあそ。又立ちめとそ。此彼九折なる樹下に立ちつ。株に尻をうけ。額の汗を押拭ひるどとる程に。とろれば左まのかたに墓所なく。山田の畔小舊新紀石塔數建を當下四五六そ。全双をえうといくにあれをえぬへる欲今ゝにらべも。墓所のほとりに憩ふ員たる冊の亡骸をとゝへ葬る因縁ならめ。さ保重荷を背撓負て。路を走るに自在ならど。ちらしてく天の明るべ。いひつるもめひるけんとく。癖めくといべ全双そ今更に。別とも〻小惜まて。何とも回答難たもが。数回歎息し。大いに冊の本貫なれども。ちゞ身ゆるれ旅なりされば葬のゆ憑むべき寺もなく。この処へ亡骸を。藏めまゐらせんい便宜に似たれど。引導読経の声もはせず。捨ゞが如く瘞んゆ。そのるとうとい忍びゞく。それも次意の一大ゆ小。どひとうるらべ。とゆせんが。鋤鍬なんども齎まべ。人に情んも更閑く。人家へいとも遥なり。といせもあ〻べ。るそのこゝらろ易く。うんゆ。彼処の土を穿起しく。ふく穴を掘たるゆり右に。の卵塔へ倚かけたる鋤鍬い忘れてあける物とうん。ゆるこれいゆとる里人の死たるを聖の旦角に葬んとて。甲夜ごろ藁て張里坊に掘せるる安らるべ。ゝへ憩ひ〻らべめうる。れ彼安をたゝうしらべ。れ主が母ゆをこの処へ葬べ。因縁のゆりけんとのひゝ。加禰今夜米谷へまゝくとゆ。木精塚を掘起し。鋤鍬ゆ金ゆくとい宝の山へ入つく空く帰るが

如し。ちろ所小今由くとそのく。鋤鍬さくよ獲たるゆ。天の賜あらざ仔ぞや。
ちぶるゆろと。説諭せば。全奴有理と点頭ゆく。遽しく溢梶を扛あつし。
件の鍬をうい取に別よ穴を掘んとするを。四五六急よ推とゞめ。全奴よ
噫。和主い律義ゆるりのぞ。とく埋よとのゆぬぢりゆ掘たるこの穴のあるを
えんぐやとゞく。と指せば。全奴いとろを汐ぞ。そい簡畧も物よるべ。僅よ
一の変を掘ともいとぞろ時をうつさん。今りし其処へ葬らば。人の墓を竊
ゆを天も明が忽ち。よ舊の施主よ掘捨られて終よ財の腹を肥さん。
うゆんとをいゆりのゆみと。咳ひば。全奴いとくもあらぬ髯掻拊和主い
僅よ一を知まどもいまどその二をちらざりけをゆ。ろゆよ此処い寺内ゆ
あらぞ。兵一をの墓所ゆんばゆゆく。定る主ありて。化々の葬をば汐も許
さぶ。ちろ所とんいその亡骸をこのほとりへ埋ばくしゆ。穴鍋よ埋るとも。

新よ掘たる壙の墳い母のごゆちちろべし。里人示られをえて。或い疑或い怪を
終よとれ掘起さば。却て母れの亡骸い何処へ捨られんも。又量ぶしゆる
小今ちの変へ葬ると。い彼施主縁故を向ぞ。り鬼神ゆんどのせゆ
ゆとおそん怒ひと。ゆゆく小掘もくさぞ。彼新葬ゆろともに叮嚀小菩
提を修ん欲。ゆるとんいゆれ一銭を費さどゞゆく。親のゆよ読経さ。
永く菩提を修ん。又儔ゆん好事ゆらぞや。こん鳥亂穴を穿く
する謀とゆんゆめり。とほりゆよ説示せば。全奴いとゞも。学を接地
と拍寔よ出ん身い吾黨の文珠ゆり。可惜男ゆ小貴鐵をさんるゆ
ゆと唱嘆し。遂よ母の亡骸を。件の穴へおさめ小ゆれば四五六ちひく
く。鍬りて壙を覆ひけ。押ゆ匕鴉着ゆ。さて傷よ小り除ある石
塔を將くゆをて上よ居太山檜の枝折ゆりて。墳墓の左右へ挿。ゆく。

回向たのむ。といそがせば。全双はふるくびゝ濡と袖の露を。拂ひあへど額つゝ
く。彼のひとりたもるゝ親の。後の世をめて安うれと。念ぜれい四五六も。弥
陀佛。〳〵。〳〵。とうり返〳〵なる苧環の。糸のらるゝ〳〵いとゞく。こゝほそ
さもいまゝぬ。めく〳〵全双はうち念〳〵。うち念〳〵つゝ頭を擡彼石塔を月
光とうんやうゝ眉根をよせ。その彫著たる方なる文字は見えれたる
ひ持ぞ。もる。四五六あん身は読やせん読ぐぶちて。ゆゝせめとゞが間ちく
透〳〵見く。文字を墨あく染たるゝ夏雲。独峯信士とあり。又逆朱
を入れたるゝ春月清光信女とあり。ゝれい正〳〵その妻あそ頃日身ゆゝり
たりあれば。親族ら〳〵送葬しく。同堅〳〵埋んとて。穴をゞ掘せ〳〵
ゝらんとゝふをゆめけく全双はゝらぞふ。隙を礙と打。ゝ不思議ゝるゝも
ありゝり。ゝゝゝ養父双四郎どの〳〵戒名を。夏雲独峯とゆゝり。ゝゝ

ゝの石塔ゝ。ゝゝゝ戒名あるのゝゝゝゝゝ。夫婦とおゞゝく。逆朱を入れて
春月清光と彫著たる。その変〳〵ゝゝゝ母を葬るゝゝゝ前の世ゝり。
ゝの山圃のヱとある。圃果ゝこそゝゝゝゝゝめ。ゝれゞゝの戒名をゝゝも用
ゝゝゝゝゝ母を。春月清光と稱〳〵ゝん奇ゝゝり。奇ゝゝり。と呉音ゝ嗟嘆〳〵て
己ざれゞ四五六も今ゝゝゝゝゝ脱ぬ終の友ゞゝをゝゝ結び〳〵ゝちゝり。
されゝ四五六が思ひ量ゝゝゝ一点錆ゞ。ゝの変を掘せゝゝゝゝゝ虚空蔵の
属村ゝる大象地の名の毘巴法師木阿弥陀佛ゝゝゝゝゝゝゝゝ父の某甲
十九箇年前ゝ世を逝て母のゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちつらんと怪しみて、ふさびて壌を掘起せば、澄樋の内より枯死の老女を納たるあり。年の齢八十阿弥陀佛が母なりしくゑたるまゝ、誰らかられて、驚るざらんこゝ何ぞめ所ぞ。とゝんゝ疑ひ怒ひつ。絶主も道者も立まどひて呆るくもあり。おそるくもあり。只とゝいとり捨よと罵るもあり。当下村長且く尋思して。木阿弥陀仏ホよいよ。大和八国のちゞめるれど神武天皇以降。他の穿を奪て母のが墓をせゝゆゑ。顧みからの高峯八峯の高れカ称達多りて。こゝ全く鼻高殿の呼ばるゝべ。さゝを後の崇をもとらん。腹たゝしゝとても捨るべ。却て大なる殃危まやめべからん。只この澄樋なる亡骸をば。舊の如くよゝ瘞て。その母を葬て花を手向るとれつ。ゆゝとも水を向窣都婆を建る日あり。ゝとも妻とべゝ此彼一體の只ひをすゝ菩提を修ゝ。ゝ小

ゝたる絶餓鬼ゝめらゞ。ちつせんゝ崇もるゝこの功徳りようて母れゝさらるゝ。ゝん分も現當二世安樂。疑ひめ。と説示せば。衆皆有難と稱賛し。聽て晩稲が亡骸を舊のゝ小埋つ。その傷ゝ穴を掘て木阿弥陀仏が母を葬て母の石塔をゝ新ゝ建て。おるゝ戒名を彫著たり。とべてゝ此辺の人のゝさる素朴るゝ。ゝられてゝこの辺ゝ山ゝとゝの小縣小て人ゝ各人の言を推さゞをゝて木阿弥陀佛ゝ。村長が教ゝ悔らゞ件の亡骸を。何処の誰とゝちねども。ゝろ母とゝるゝ共ゝ香を焼花をゝ向月忌年回の追善をひとゝ延ゝとゝ行ひけゝ。この善根を植たれがゝ。後ゝゝ彼亡骸を全攻が母ゝとゝのゝゝらゞゝ。その方ゝ希るゝ幸ひあり。是ゝゝ先近々の田夫牧童縁由を伝ゝ。怪ゝ大象ゝる木阿弥陀仏が母ゝ葬ゝゝゝゝ亡骸がゝゝゝゝゝ世ゝ離魂病ゝ。形貌のゝゝ

かえる病めりとて咳いたく死しぬ。亡骸のふくろのうちにふるふ。咳も死ぬ弥事なり。されてえうう。おのづから戒名を彫著たる石塔が並びて有るを
とく。殊更よいひのちろりかやうに祝よ。彼咳よ埋たる主の死骸の主出るところ。近々の徒又ものうを伝へく咳原来木阿弥陀佛が母の軀
のふくろふるうたるまのあらざるくもの咳なるものくみとそ果て笑て已よ
けれどもの多逐よ人口よ膾炙しつ。舊の主の出る譬言よ必元の木阿弥
とぞいひける。この諺の鑑ハ塩尻の明王百穀編よも載られたれども
説ところとそのよ大同小異と且塩尻よハ須慶の時のものとて木阿弥
陀佛がよ。このわよ話る。却説全咳ハ母をば既よ葬ってう今ハ後事とそ。
四五六とりろともよ彼鋤鍬を携ぶ。又兵管よ支る程よ辛くたく
米谷よ。本繕塚のほとりよ来よけり。まられとるもやうぐ天ハ明ど。嘯も

めいぜきりよければ。石滴を結びて咽喉をうるほす。さて全咳ハ四五六よ
射ひ鬻まいよの遠くて全くあんよが謀を咳果ど。まづ行ふべきう
を。説ちらしめへとやが四五六苔て。されびてよ半く進ふ先ちちとのの
塚を掘起し。彼風流士の太刀を奪ひ取るとそ。その往半く進が身早
小如ちるんちらハ和主いまをもやさんが。実父の怨を復ちるあらどそ。
時ハ泊がて失ひ易し。さくくと促せば。全咳ハ喜ってふく鉄びかん身が
謀究て妙なり。彼太刀失るべキく進ハ生て平城へハ帰ちがちん。
う中阿容くと帰るとも続井殿の怒烈しくと安穏ハ有べらん。
母の今般の言の禁ハ悟らでうと怨の及ハ彼風流士よ中ん有りのう
ハとて鎌柄握りち向上るかこハ山深く清赤松生茂り蒼竹が下の
水の音も。委ねたる潔ち朱の玉離上久て。塚の左右よ禿倉のり。彼首

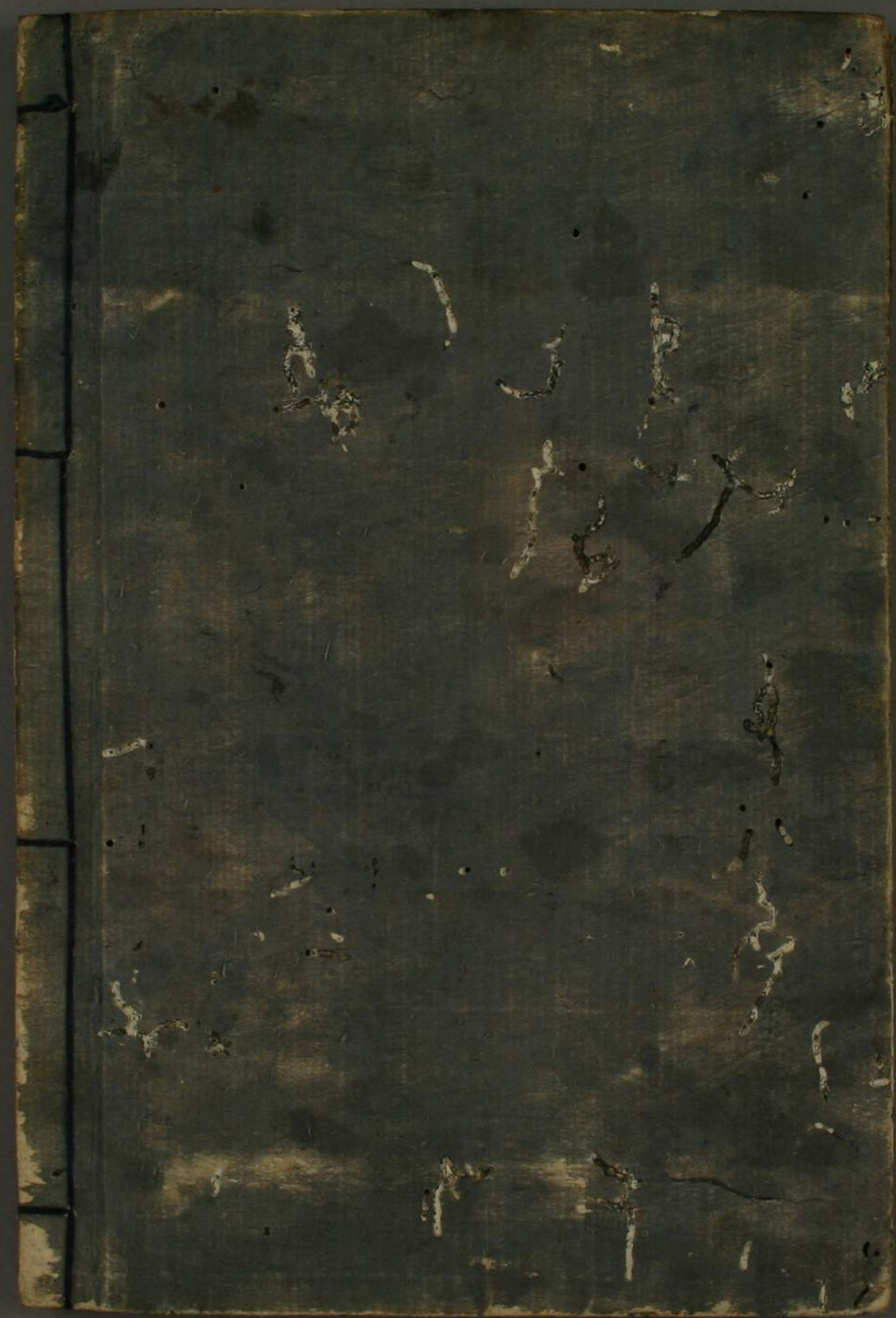
是首とれる(丑)が[illegible]社の鳥居に額を打て辨財天女毘沙門天と筆太に写したる。金字ハ月に照そひて尊もあれど今霄より。び着たる蓑衣の汚れ穢忌て近くも寄らず。挽残したる楠の土より上一丈ばかりを。大きな石に化たるを要て碑石に用ひつ。木精塚の三字を彫たりけるを

揺蕟んによりや百人がちからを借とも一朝一夕にすべうもあらねど。四五六も全体も思ひの外のふかみれて只忙然とまばりてありしが。ややありて止べきにあらねばさりともと思ひかへして。まづ試ろに。楠の株のあらはれたる間を掘るに正に是風流士の大刀。再び人間へ返るべき時こそやありけんあやしき似ぞ株ハ朽て無落ちて塊となり七両八

られよ勢ひつよく息をつぎ続と掘るほど小土中五六尺ばかりの日て果しく
半ばかり見るんかりと競ひかゝるつゞくうちて引出せば紛ふべうもあらぬ宝
剣の唐櫃く残雪い凍もつく夜の山風膚を徹し狼の声を音谷小雪
くもも骨栗然ばりうんどそれをば屑とせば。両人いまもく力を戮せ撓
を揉断てこれをえるとに笹呂三重とあがりて。櫃の中又笹めりこの漬をも
ゆゝまねぐ放てる第三の笹に至るといろすれども益雨うば。わだりの
ゆゝ時を稿しく山路まく夜をめく。半之進ホよちられるのば。講しとへ
も仇とあるうん兵打砕けと四五六ばふり揚く打鋤い。まよひぐかし
反らる。向を抜ば入全次が。鎩柄高く礙と打。丁と菱石と数回打れて
笹い砕飛風流士の大ク頭を出たりされば。
するに奇なるまま塚の中ようと吹出と。魔風頻よ面を打彼風流士を

中天へ吹揚とそええたり天かい須臾内たつ。平城のあるへ飛去らんとす。
時ま鬼吹門堂の門扉さと開けく。異相の天王忽然と立あらられれま
るの長な鞘を取て面を怒らく眼を睨て虚空通ま内ばやく。大カ
を追蒐追兵く。含たる鞘をとり伸く。打落さんと云ゆへい大かい追
ま〻く怒ま平城のかへいももるん。舊の宮へ入らんとすれば。蟬娟たる天
女。辨天堂の上ま立あらられ抱る琵琶の撥をとりて。徐ま拍たりうこれを
取らんとゝ。のの折魔風ふくび吹暴れく。月さへ暗くるまく小大かい
頭小光を放ちその声絹を裂ごく。西を投てぞ飛去げる正ま夏天王
天女の擁護小ふつく。順勝の身ま。のゝべりけるその禍を西へうつて。
宇茲八月下旬。大内陶が刃小倒る。家の乱を今ごろ。ちるや赤くの塚の
鬼小。琴るさんく全次が。四五六もまかりとる。鋤鎩撲地と擲捨て醉ゆ

如く醒(さむ)るとく張(はり)つめより弦(つる)歛(おさ)むてろの弓(ゆみ)とる服(ふく)の兩(ふたつ)を瞻仰(あおぎ)て

ほいなさり。

右夢南柯後記卷之三終